

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節祈禱会

インマヌエル

――詩篇第2、8篇、イザヤ書第43、63章――

1977年12月25日

小池辰雄

エホバとその受膏者 どん底の生まれ方 未生道 アルファの世界 オメガの世界 神さまは
最大の芸術家 汝はわがものなり 矛盾道 本然の汝 キリストの恩寵のゆえに 生まれぬさ
きの我 贖いの血 未生の世界 活ける文字 祈り

【詩篇2】

1 何^{いか}なればもろもろの国^{くに}人はさわぎたち
諸民^{たみら}はむなしきことを謀^{はか}るや。

2 地^{おさたち}のもろもろの王はたちかまえ、
群伯^{おさたち}はともに議^{はか}り

エホバとその受膏者^{じゅこうしや}とにさからいていう。

3 われらその械^{かせ}をこぼちその繩^{はな}をすてんと。……

4 天に坐するもの笑いたまわん、

主かれらを嘲^{あざけ}りたもうべし。……

7 われ詔命^{みことのもり}をのべん、エホバわれに宣^{のたま}まえり、

なんじはわが子なり今日われなんじを生り。

【詩篇8】

1 われらの主エホバよ、

なんじの名は地にあまねくして尊きかな、

その栄光を天におきたまえり。

2 なんじは嬰児^{おさなご}ちのみごの口により

力^{もとい}の基をおきて敵にそなえたまえり。

こは仇人^{あだびと}とくらみを報いるものを鎮静^{おしず}めんがためなり。

3 我なんじの指のわぎなる天を觀^み、

なんじの設けたまえる月と星とをみるに、

4 世人^{よのひと}はいかなるものなれば

これを聖念^{みこころ}にとめたもうや、

人の子はいかなるものなればこれを顧みたもうや。



【イザヤ43】

1 ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此^{かく}いい給う、

イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言給う、

おそるるなかれ我なんじを贖^{あがな}えり、

我なんじの名をよべり、汝はわが有^もなり。

2 なんじ水中をすぐるときは我ともにあらん。

河のなかを過ぐるときは水なんじの上にあふれじ。

なんじ火中^{ひのなか}をゆくとき焚^やるることなく火もまた燃えつかじ。……

4 われ看^みてなんじを宝とし尊きものとして亦なんじを愛す。……

【イザヤ63】

1 このエドムよりきたり緋衣^{あかきころも}をきてボツラよりきたる者はたれぞ。

その服飾^{よそおい}はなやかに大いなる能力^{ちから}をもて厳^{いかめ}しく歩みきたる者はたれぞ。

これは義^よをもてかたり大いにすくいをほどこす我なり。

2 なんじの服飾^{よそおい}はなにゆえに赤く

なんじの衣はなにゆえに酒槽^{さかづね}をふむ者とひとしきや。

3 我はひとりにて酒槽をふめり。

もろもろの民のなかに我とともにする者なし、

われ怒^{いかり}によりて彼等をふみ、

忿恚^{いきどおり}によりてかれらを踏みにじりたれば、

かれらの血わが衣にそそぎわが服飾^{よそおい}をことごとく汚^{けが}したり。

4 そは刑罰の日わが心の中にあり、救贖^{あがな}の歳^{とし}すでにきたれり。……

8 エホバいいたまえり、

誠にかれらはわが民なり虚偽^{いつわり}をせざる子輩^{こら}なりと。

斯てエホバはかれらのために救主^{すくいぬし}となりたまえり。

9 かれらの艱難^{なやみ}のときはエホバもなやみ給いて

その面前^{まへ}の使をもて彼等をすくい、

その愛とその憐憫^{あわれみ}によりて彼等をあがない、

彼等をもたげ昔時の日^{いにしえ}つねに彼等をいだきたまえり。……

11 爰^{こゝ}にその民にしえのモーセの日をおもいいでて曰^いけるは、

かれらとその群の牧者とを海より携えあげし者はいずこにありや。

彼等のなかに聖霊^{ひよきみたま}をおきしものは何処にありや。

12 栄光のかいなをモーセの右にゆかしめ、

彼等のまゑに水をさきて自らとこしえの名をつくり、

13 彼等をみちびきて馬の野をはしるがごとく



躓^{つまず}かで淵^{ふち}をすぎしめたりし者はいずこに在りや。
14 谷^やにくだる家畜^{けだもの}の如くにエホバの霊^{みたま}かれらをいこわせ給えり。
主よなんじは斯おのれの民をみちびきて栄光の名をつくり給えり。

●エホバとその受膏者

詩篇の第2篇、

「^{いか}何なればもろもろの国^{くにびと}人はさわぎたち
^{たみら}諸民はむなしきことを謀^{はか}るや。

² 地のもろもろの王はたちかまえ、群伯^{おさたち}はともに議^{はか}り

エホバとその受膏者^{じゅこうしや}とにさからいていう。

³ われらその械^{かぜ}をこぼちその縄をすてんと。」(詩篇2・1、3)

「エホバとその受膏者」という。申し上げているとおり、

「エホバ」

という言葉が私はまた好きになった。

「ヤーヴェーとアドナイ」

「実存者とわが主」

この二つの言葉の子音と母音でできあがっている「エホバ」という間違った読み方が実は間違っていない、本当は「エホバ」であるということを新しく私は認識しているわけです。その「エホバ」と「受膏者」即ち「メシア」は、私たちにとっては二重の、重なっている一つであります。二にして一つなる存在、抛り所であります。

「⁴ 天に坐するもの笑いたまわん、

主かれらを嘲^{あざけ}りたもうべし。」(詩篇2・4)

地上の諸々の国のまた民族の、いがみ合い、争いは実にいつまでたつても同じこと。しかしながら、こないだ、サダト大統領がいわゆる政治家の域を乗り越えて、本当に超政治家となつて、

「神の命令によつて来たのだ」

という彼の演説を聞いて、私は、今語っている彼は本当に捨て身の本ものであるということを感じた。それが確かに全世界を打ちましたね。あれだけの気合の政治家が欲しいですよ、政治屋ばかりいて。こちらでいえばやはり、西郷南洲のような魂です。

どの方面のひとでも結局、イズム・主義主張を乗り越えるまでは本ものにならない。思想が人間を導くのではない。どこまでも超思想の世界。本当に人間を打つものは、人間の存在の本質が魂であるかぎり、魂の世界の根拠、根源から出た言葉でなければ、また行為でなければ、人を打たないということがはつきりする。

その意味において、青年諸君こそ本当にその中に打ち込んでいかなければ。周りがどう



であろうと、もうそんなことは左顧右眄する必要はない。17、^歳18あたりから20代の青年諸君は本当に打ち込まなければいかん。今はもうギリギリのときに来てます。どうぞ、このような福音の現実と呼ばれたかぎり、惜しいです、もう左顧右眄、逡巡していたのでは。

●どん底の生まれ方

だから、この「天に坐するもの」は、地界のいわゆる偉そうな、権力ある者は問題でないと。どんな力も、原子力も水素爆弾も、我々の恐れるものではない。私たちが本当に畏れかしこむものは、この「エホバとその受膏者」、

「エホバの神とキリスト」

であります。

しかもこの詩篇で今、私たちが読もうとしているのは7節です。

「^{みことのり}7われ詔命をのべん、エホバわれに^{のた}宣まえり、

なんじはわが子なり今日われなんじを生めり。」(詩篇2・7)

これはメシア預言のまた一か所です。まさに

「今日われなんじを生めり」

と、イエス・キリストが天界から地界に、

「アブラハムよりさき^{みどりご}にありし」

キリストが地界に現れた。^{みどりご}嬰兒の姿をもつて馬槽^{うまぶね}の中に現れた。全く極限状況において彼は現れた。人間のおよそ考えられるどん底の生まれ方をなさった。どん底の生まれ方をしたのは即ち、どん底において人を荷なうという、その既に^{しるし}徴であるわけです。『無者キリスト』に私は書いたつもりです。

●未生道

そういう^{みどりご}嬰兒。先程からたくさん小さいひとがいて、私はじつと見てみると、もう何ともいえないですね、あの子どもというのは。本当に未分の世界ですね。それはかつて私は言ったことがあります、

「^{みしょう}未生道」

という。柳宗悦^{むねよし}が使った言葉です。あるいはこれを中間道ともいいますが。未だ生まれざる道。

「闇の夜に鳴かぬ鳥^{からす}の声きけば

生まれぬさきの父をぞ慕つ」

という。「闇の夜に鳴かぬ鳥の声を聞く」という。これは白隠の句ですね。さすがにこの白隠は素晴らしい坊さんです。そういう現象界の奥の世界。

「根源現実」



と私が時々申しますが、その根源現実です。小さい子どもを見てみると、根源現実がそこに無心に現れている。嬰兒みどりごにおいて、イエスという嬰兒みどりごが徴中の徴であつた。いわゆる差別、わきまえる（分別）、そういったもののもうひとつ奥の世界。それは

「本然」

の世界です。この本自然界のもの、ナザレのイエス・キリストはまさにそのようなひとでありました。

●アルファの世界

同じく詩篇の8篇に、

「われらの主エホバよ、なんじの名は地にあまねくして尊きかな、

その栄光を天におきたまえり。

²なんじは嬰兒みどりごちのみごの口により力の基もとをおきて敵にそなえたまえり。

なんと不思議なことですか。

「なんじは嬰兒みどりごちのみごの口により力の基をおきて敵にそなえたまえり」

という。

こは仇人あだびととうらみを報いるものを鎮静おしずめんがためなり。

³我なんじの指のわざなる天を觀み、

なんじの設けたまえる月と星とをみるに、

⁴世人よのひとはいかなるものなればこれを聖念みこころにとめたもうや、

人の子はいかなるものなればこれを顧みみたもうや。」（詩篇8・1〜4）

「嬰兒みどりごちのみごの口により力の基をそなえた」

という。「嬰兒ちのみごの口」から発する言葉はいったい何というか。「ア」の字です。この「ア」という音、これは最初の声です。そして、一番アルファにして、「アルファ」の「ア」――「アルファなるもの、オメガなるもの」というけれども――この「ア」という発音が一番根源の音です。讃美の音でもあるし、深い嘆きの音でもあるし、感嘆の音でもある。もう言葉以前の言葉といえますか、音。そういうのが、この嬰兒の口にそなえたところの、力の基になるところの音である。いや実に、その音はその奥に力をもっている。この「ア」という響きは一番深い意味においては、讃美であり、祈りである。

「アーブ」（父）といつて、神さまを

「アッバー！」（父よ！）

という。みんなこれは「ア」からきている。「父よ」という。だから、私たちが「父よ」という言葉よりも、キリストが「アッバー」とか「アーブ」とか「アーブ」と仰つたその発音が、いかに神に呼ばれるにふさわしい音をしているかということをおわざるをえない。

そういう、無心のすがた。



「無心」

とは素晴らしい言葉です。これを「こころなきひと」と読んだらおしまいです。そうではない。いわゆる私心のないのが「無心」です。子どもの動きをみていると、無心なんだね。だから、

「幼児のごとくならずば、天国に入れない」
おさなご

とキリストが言われたのは、そのような讃美、また祈りが「アー」の響きをもって表されているような、そういうところをキリストはやはり見ていらつしやったと思います。

私たちがこの嬰兒を、キリストの降誕を憶えるときに、そのような「未生道」みしやうの世界、これを本当に自分の身につける。観念以前の世界、観念を超越した世界。これが本当の「本然道」であり、また本当の本然界、霊界であります。霊然の世界に通ずるわけです。それが、私が今、ちょっと皆さんと祈り会をするときの大事な最初の「アー」なんです。祈れないなんてことはない。「アー」で祈りなんだ。

●オメガの世界

今度は、「オメガ」の世界。オメガの世界はどこから引つ張ってくるか。イザヤ書です。旧約聖書で、もし、どれか一卷をとれと言われたら、文句なしにイザヤ書です。イザヤ書に、数の上からいつても不思議なところがある。

「イザヤ書43章、53章、63章」

です。これはみな「:3」がつく。この3章が不思議に大事なトリオになっている。

まあ第二イザヤ、第三イザヤというものは、自分でもってこの文語体を一冊の帳面に詩文に書くといいです、聖書のこんな印刷なんかしょうがないから。魂をこめて祈りをもつて自分で書いていく。私は文語は好きなんだけれども、この印刷は嫌いだよ。せっかく詩なのに、こんなにズラズラ詰めて印刷してある。なにを紙を儉約するか、そんな儉約することはない。聖書というのはもつと余白をいれてゆつたりとつくればいい。重くたつていいよ。少し重い聖書でも持たなければダメなんです、安直なことばかり考えているから。

イザヤ書43章、

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此^{かく}いい給う、

イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言給う、

おそるるなかれ我なんじを贖えり、

我なんじの名をよべり、汝はわが有^{もの}なり。」(イザヤ43・1)

まあ大変な言葉ですね。旧約の中で一番好きな句のひとつです。

「おそるるなかれ我なんじを贖えり」

「なんにも恐いことないよ。なんにも心配はいらんよ。どこを見ているのかね。私はお前を贖ったではないか」



と、完了の事実をもって仰っている。「これから贖うよ」ではない。

「我なんじを贖えり」

と、全的な贖いなんです。文句なしの贖いです。「でも」なんて言わせない贖いなんですから。あなた方は本当にこの文字の世界に入っていますか、

「私は贖われています」

と。まだ自分が問題になっていませんか。

「それでも、まだ入学試験があります、まだ就職のことがはっきりしません、まだ

私は結婚問題があります」

とか、

「生活難があります」

とか。だけれども、私が申し上げているとおり、運命環境その一切のことにかかわりない。

「我なんじを贖えり」

ということは、力をもって、生命をもって、

「私がお前の生命だ。どこに問題があるか。絶対なものがお前の中にきているんだ。

何をもってこれに代えることができるか。そのような贖いの世界に入っている。

私はお前の名を呼んだ。今も呼んでいる。これからも呼ぶぞ。」

と。「過去・現在・未来」が、ひとつの過去の中に、ひとつの現在の言葉の中に、ひとつの未来の言葉の中に、その三次元が入っていないければダメですよ。

私は、この聖書の読み方は、聖書の解釈者が厳密にやるが、何が「厳密」かと。分析してやったら、解剖学みたいで死んでしまうよ、生きているものを分析したら。生けるままにその本質をつかむ。花を観て、花の花弁を数えるのではない。花を観て、花の本質を直ちに観て、自分がその花となるような、そういう生命の一如の世界、溶け合いの世界です…（異言）…：そういうところに入らなかつたら。もう私はたまらんです、そういう生命の中に入ってしまったているから。

神さまの造ったものは、不自然なものはひとつもない。どれを見ても素晴らしい美しさをもっている。その姿と色と形はみなそれぞれのつぴきならぬものをもっている。なんという驚くべき必然性を、天的な、天然というものは何と素晴らしい必然性をもっているか。画家がどんなに書いても、そこには何か不自然がある。けれども、この天然はそうではない。なにも画家の悪口を言っているのではない。私たちは何をしようと、人間にはみんなそれは不完全だ。

●神さまは最大の芸術家

芸術は、神さまが最大の芸術家だから、なぜ芸術家はまず神さまの中に本当に自分を入れていかないかね。しかし、その角度の分かっているやつは凄いことになったことは明らか



かです、日本の坊さんでも。こないだの棟方志功でも、みんなそうです。そのようなことで、自分でも驚くようなことになるでしょ。皆さん一人ひとりが本当にそうです。何をなさっていても、自ら怪しむようなことになる。

私は、70歳をちよつと越えてしまつたけれども、これからが私の本当の生涯だと思つてゐる。鈍器晩成という。鋭器ではないから、私は。だから、あと少なくとも20年は神さまに歳を籍^かしていただかないと。ということは、真理に対する敵がたくさんいるから、まがいものが。どうしてもこれを証しないでは私は死ぬわけにいかん。

もう私は預言者との使徒たちが親しくてしょうがない。預言者と使徒たちが私の本当の友だちです。内村鑑三とか、藤井武、塚本虎二、手島郁郎とかは、みんな優れた人たちです。私はちつとも優れていない。平々凡々なんだ。だけれども、本当のキリスト者は天才よりも少ない。

とにかくもうキリストが中に溢れてしまうと、今、部屋に光が相当あふれているけれども、そんなもんじゃない。

● 汝はわがものなり

「我なんじの名をよべり、

汝はわが有^{もの}なり」

と。皆さん一人ひとりに、

「汝はわが有^{もの}なり」

という。私はなぜ、さつきから、「オメガ」なんて言っているかという、皆さん方においてこういう凄い言葉が、オメガ的な言葉なんです。もうはつきり、決定しているんです、決定的なもの。「テロス」なんです。テロスの世界。「終わり、完成、目的」、それが現実になってゐる。

「^{みずのなか}なんじ水中をすぐるときは我ともにあらん。

河のなかを過^{ひのなか}ぐるときは水なんじの上にあふれじ。

なんじ火中^やをゆくとき焚^やるることなく

火もまた燃えつかじ。」(イザヤ43・2)

どのような現実も突破できる。ダニエルがそのようなところを突破しました。

これが先程から申し上げているとおり、キリストと一如になつてゐる世界、その中に溶け込んでゐる世界です。海水は、水と塩とを分けることができな^い。H₂Oは分けることができな^い。H₂Oが水である。そういうように、そんなに私たちは贖われたら、贖われたと同時にキリストと一つになつてゐるんです。「贖われた」という觀念を信じてゐるのではない。命題を信じてゐるのではない。ところが、一般の信仰はみんなそれだ。

「十字架は贖罪である」



という命題を信じている。それは観念信仰だ。

「⁴われ^み見てなんじを宝とし尊きものとして亦なんじを愛す。」(イザヤ43・4)

神のゆえに、キリストのゆえに、私たちは愛されている。まずこんなにまで顧み、棄てず、ゆるし、鍛えてくださるキリスト。それが愛なんです。ただ可愛がつていることが愛ではないですよ。そういったこの43章は霊的な、白熱的な現実です。

●矛盾道

はい、53章。ここはよくご存じのところだから、もう読むこともないです。徹底的にその贖いがどういうことであるかということを経53章は語っている。

「我なんじを贖えり、

我なんじの名をよべり、

汝はわが有^{もの}なり。」

というのは、何によってそう仰るかというところ、53章で43章をはつきりと言っておられる。どん底の荷ないです。

これはもう説明なんかできるところではない。黙って読んで、そして黙ってその世界に入^{ひれふ}って、もう平伏して、言葉にならない感謝と讃美をするよりか他にない。誰の理解も、誰の同情も、このイザヤ書53章に語られているキリストの、この同情以上の荷ないというものはない。

これでもう問題がありますか、これで。私たちの魂の世界に問題がありますか。何もありません。なんにも問題がなくなつた。これを

「無」

というんです。虚無ではない。

「何も問題がなくなりました。たくさん問題だらけだけでも、そんなものはもう全部なくなりました」

と。これが

「矛盾道」

という。

「煩惱即菩提」

というけれども、煩惱即菩提という道が、現実がここにあるんです。

「このダメのカスのまんまでいいんです」

と。そうなんだよ。決して偉くなる必要はない。何か少し「成りました」と言ったらおしまい。私たちの中でいよいよキリストは成りつつありたもう。



●本然の汝

いつかお話したかな。

「ヴェルデ ヴァス ドゥー ビスト」(werde was du bist「お前が在るところのものになれ」)
という言葉がある。これはニーチェの言葉だ。英語ではむしろ、「ヴェルデ」は「ビー」でもいい。

「ビー ファット ユー アー」(be what you are)

「お前が在るところのものであれ」

という。

「お前が在るところのものになれ」

という、「お前が在るところのもの」というのは、根源の汝、本然の汝。

「本然の汝になれ」

ということです。ニーチェはかわいそうに、その「本然の汝に成れ」という道はキリストにあることを受け損なった。この言葉にはもの凄い真理性をもっている。けれども、どのようにしてこの言葉を本当に活かすかというところで、彼は道を知らなかった。

「本然の汝になれ」という。私たちは「神の似姿」に創られているでしょ。これが「本然の私」です。本然のあなた方一人ひとりです。

「神の似姿に創られているから、それに成れよ」

ということ。それはなんてことはない。

「霊が止どまっている霊止ひとになれよ」

ということですよ。

●キリストの恩寵のゆえに

では、どうして成るんですか。キリストを受けとるよりかはかほかはない。本然の汝は、

「パラダイス・ロスト」(楽園喪失)

でどこかへ行ってしまっている。それになるために、

「パラダイス・リゲインド」(楽園回復)

してくださったところの、楽園を回復してくださったところのキリストを受けとる。この

「ヴェルデ ヴァス ドゥー ビスト」(お前が在るところのものになれ)

は、私たちはキリストを受けとると、

「南無キリスト」

においてこれに成れるんです。そして既にもう成っている。「贖えり」という。

「キリストは私を贖ってくださいました。だから私は本然の我にもう成っています」という。

「アイ アム ザット アイ アム」(I am that I am.)



なんだ。

「私は在るところのものです」

と。「ビー」(…であれ)ではない。「アイ アム ザット アイ アム」ということは、キリストの

「われ汝を贖えり」

を受けとったところにそれが来ている。えっ？ 来ているではないですか。

「それでも、あなたはまだこうじゃありませんか」

なんて、何をぬかすかと。

「私の一番奥が見えないか」

と。地上で誰がキリストのごとく生まの現実で、キリストの如く在れるか。それは誰もできない。信仰の現実において、恩寵の現実において、私たちは本然の我で在るんです、キリストの恩寵のゆえに。これをはつきり受けとらなかつたら、これを！

「それでも……」

と言って何を見ているんですか。相対的な自分を見てどうなるんですか。

「信仰、信仰」

なんて言ったってね、そんなところをゴタゴタゴタゴタやって、それで「クリスチャン」というような顔している。だから、キルケゴールが、

「本当のクリスチャンは天才より少ない」

と皮肉なことを言う。だけれども、天才よりもはるかに多いんです。本当のクリスチャンは、多くありうるんです。ただ現実には、その一番やさしい、一番簡単なところを受けとらないから。無条件にキリストの恩寵の世界に入っていないから。

あなた方、空気から離れることができますか。我々はどこへ行ったって、空気の中に包まれている。どこへ行ったって空気を吸っている。これが相対的な人間の根源の現実でしょ。相対的な私たちの本当の生命的現実でしょ。それならば、私たちの魂の根源現実、キリストによって既に贖われてあり、キリストの霊の霊気をこの魂が吸っている、そういう現実です。ざるを得ないんです。吸わないでは生きていられないんです。

●生まれぬさきの我

在ることが直ちに本願の祈りの世界なんです。それが本当の未生道^{みしやう}です。

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声きけば

生まれぬさきの我をぞ見る」

というんだ、今度は。父ばかりではない。

「生まれぬさきの我を見る。本然の我がみえてきた」と。

「天上天下唯我独尊」



と言ったあの「我」は「凡我」ですから。

「凡我だけが尊い、そのほかのものはいらん」

と、お釈迦さんは。私たちは「神の似姿」につくられている。

もうね、聖書の大事な文句は本当に身につけてくださいよ。まあ70歳も越えてやつと私はこんなところに入ったただけでもさ、あなた方はもったいないよ、20代は。どうしてくれるんだ、70くらいになったらどうなるか。見えなくなってしまう。見えなくなっていよ、自在に現れてくるから。写真を撮ったら映らなかつたなんて。なにも私は摩訶不思議なことを言おうとしているのではない。それくらいな、本質的には、映つても実は映っていないようなひとにならなくちゃ。

「あの映っているのは私の相対的な私で、あれは私の写真じゃありませんよ、私の写真はこんなところに見えませんよ」

というのが本当なんだ。みんな「写真、写真」というけれども、あれは写真ではなくて写偽だ（笑）。まあ半分冗談だけれどもね、偽者が映っている。現象が映っているので、本質はまた別。しかし、その現象において本質が見えるようにならなければウソですけどもね。

●贖いの血

そういうのが、このキリストの贖罪のありがたい現実であります。オメガ的現実です。それから今度は、63章にいく。それをもつと深刻にまた現した。酒槽さかぶねを独りで踏んだひとがある。

「このエドムよりきたり緋衣あかきころもをきてボツラよりきたる者はたれぞ。

その服飾よそおいはなやかに大いなる能力ちからをもて厳しく歩みきたる者はたれぞ。

これは義をもてかたり大いにすくいをほどこす我なり。

「義をもてかたり大にすくいをほどこす我なり」

という。「義」と「救い」が同じ言葉になつている。義を与えるもの。「救い」という言葉は「愛」ということと同じです。「愛する」とは「救う」ということです。人を救いあげるのでなければ、本当の愛ではないよ、そんなものは。

2 なんじの服飾よそおいはなにゆえに赤く

なんじの衣はなにゆえに酒槽さかぶねをふむ者とひとしきや。

3 我はひとりにて酒槽をふめり。

もろもろの民のなかに我とともにする者なし、

われ怒いかりによりて彼等をふみ、

忿恚いまだおこりによりてかれらを踏みにじりたれば、

かれらの血わが衣にそそぎわが服飾よそおいをことごとく汚けがしたり。

罪に対するところの、憎しみに対するところの怒り。そうしたらば、「かれらの血わが衣に……」という表現。酒槽を踏んだその葡萄酒のことと相照応して書いているわけです。



4 **それは刑罰の日わが心の中にあり、**
救贖の歳すでにきたれり。」(イザヤ63・1〜4)

ここもそうでしょ。刑罰(審判)と救贖(恵み)とがまたひとつに書いてある。こういうのが自然に出てくる。そういう、キリストは自ら血を浴びてしまったんです。キリストの血は、相手を切った血ではなかった、自分の血だった。贖いの血であった。誰も一緒にするものがない。独りで十字架にかかった。

8節に慰め深い言葉が出てきます。

「8 エホバいいたまえり、

誠にかれらはわが民なり虚偽をせざる子輩なりと。

斯てエホバはかれらのために救主となりたまえり。」(イザヤ63・8)

いいですか。どんなことがあっても、自分をキリストの前には、本当にさらけだしていいかなくては。

「あなたがご存じです。申し訳ありません」

と。何でもいい。詩篇139篇にあるとおり、キリストの前には何も隠れていないんだから、照々として。けれども、自分をぶちまけていく者は、決してキリストは審きたまわない。ぶちまけていく者は、十字架上の片一方の盗賊も、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と言われた。隠したり、偽ったり、傲慢である者は、これは審判にあう。あるがまま、もうそのまま、傲慢であろうと何であろうと、

「このとおりダメなんです」

と言ってぶつかっていく者は、キリストはみんな引き受けてしまう、

「よしっ」

と。そうするとガラリと変わってしまう。もう十字架上の両方の盗賊で、はつきり、人類は二つに別けられる。人類を二分するものは何か。十字架の盗賊を、右と左でもって別けてしまう。あれが人類の分類の、一番深刻な分類ですよ。人種の差別でも、善悪でも、強弱でも、賢愚でも、美醜でも、何でもない。

「魂が碎けるか、碎けないか」

だけです。

「9 かれらの艱難のときはエホバもなやみ給いて

その面前の使をもて彼等をすくい、

その愛とその憐憫によりて彼等をあがない、

彼等をもたげ昔時の日つねに彼等をいだきたまえり。」(イザヤ63・9)

と畳みかけて書いてある。私はイザヤ書のこの言葉がまた大好きです。たまらんです、この句は。イザヤ書63章9節。こういう懇ろな、「もたげ、抱き、贖い、荷なう」という、こ



ういう愛です。

「愛は一切に勝つ」

というのはヒルティの言葉です。愛は一切を救い上げてしまう。何といっても、これがオメガです、オメガ的現実です。

●未生の世界

私たちは、みんな^{みどりご}嬰兒のような小さなきときは、そのような^{みしょう}未生の世界に、未分の世界にいた。だんだん歳をとるにつれて、ちようどしょつちゆう例えられるように、小川はきれいだったが、大海に注ごうとしていているところの隅田川なんかどうにもならん。

だけれども、その隅田川でも、キリストは贖つて、これを真清水に変えてしまうわけだ。だから、これがオメガだという。救い難きものを救ってくださったわけです。人がどうにもすることもできない。自分自身もどうにもすることができない。そういうやつを救ってくださったのがナザレのイエス・キリストのほかにはない。これがオメガの世界です。

「われはアルファにしてオメガなり」

とは、そういうことですよ。

「我はアルファにしてオメガなり。始めにして終わりなり。お前たちにそのような贖われたところの新しき現実を与えるぞ」

と。降誕節は、「十字架・復活・昇天」に通ずる。全キリスト。「キリスト」というときには、『無者キリスト』に書いたように、「キリストの十転」です。劇的十転が渾然として、「キリスト」という、

「南無キリスト」

という、このただ「キリスト」という言葉に一切が含まれてしまう。だから、「キリスト」という言葉はいかに重いか。「南無阿弥陀仏」よりか重いです。ええ。もう、居ても立ってもいられないですよ。

●活ける文字

それから、もう少し見てください。

「^{こゝ}爰にその民にしえのモーセの日をおもいいでて^{いひ}曰けるは、
かれらとその群の牧者とを海より携えあげし者はいずこにありや。

彼等のなかに^{きよきみたま}聖霊をおきしものは何処にありや。

¹²栄光のかいなをモーセの右にゆかしめ、

彼等のまえに水をさきて自らとこしえの名をつくり、

これは出エジプトのところだよ。

¹³彼等をみちびきて馬の野をはしるがごとく



躓^{つまず}かで淵^{ふち}をすぎしめたりし者はいずこに在りや。

あの驚くべき恵みの力をもってイスラエルを救ってくださったものはどこにあるかと言つて、神さまを呼んでいるわけだ。

14 谷^みにくだる家畜^{けだもの}の如くに

エホバの霊^{みたま}かれらをいこわせ給えり。

主よなんじは斯^{かく}おのれの民をみちびきて

栄光の名をつくり給えり。」(イザヤ63・11〜14)

もう火花してますね。なぜ、今のキリスト教界は、教会といわず無教会といわず、聖霊のことを本当に――「について」ではないよ――「その中から」ものを言うやつが幾人いるか。聖書知識はたくさんもっているでしょう。集会はいろいろやるでしょう。そんなことではないんだ。皆さんは

「活ける文字」

になってくださいよ、活ける文字に。本なんか書いたって書かなくなつて、いいんだよ、そんなことは。あなた方自身が活ける文字。天界に記されるところの活ける文字に。

本当にこの活けるキリスト、霊なるキリストに私たちが生きているときに、あなた方は今この話を聞きながら、もうその次元に入つていらつしやると思います。

「何かしらんけれども、熱がどこかへいつてしまった。風邪もどこかへすつとんでいつてしまった」

というわけです。

あと、祈りましょうね。そういうエホバの霊、このイザヤ書43章、53章、63章を特にこのクリスマス^{あした}の祈禱会で、私は、

「アルファにしてオメガ」

という、詩篇2篇及び8篇とともに、不思議なことになつてしまった。おわります。

● 祈り

主さま、エホバの神さま。今、祈禱会に残っている兄弟姉妹たちは――先に帰った人たちは残念でなりません――あなたを本当に受けとるときには、もはや時間・空間を超越した世界に入らなければいられません。先に帰った人たちが――いろいろな事情がありました――しかし、どうか彼らの魂をとらえてください。私たちは、この降誕節^{あした}は晨より晩にいたるまで、アルファにしてオメガなるあなたに喰らいつき、しがみつき、そしてあなたと一如にならんがために参りました。

私たちの側の何ものでもありません。あなたは一人びとりを掛け替えのないものとして顧みてくださっております。このしょうがない一人びとりでございますが、それがゆえにこそ、あなたは贖いの事態をなしてくださいました。無条件の世界です。感謝いたします。



もはや一切の問題は、あれどもなきがごとしであります。そのような驚くべき根源の現実に入らしめられ、絶対矛盾の未生道みしようの中に入らしめられ、本当に一元の世界に、一如の世界に入れていただきまして、感謝いたします。この兄弟姉妹たちの中に、

「さいわいなるかな、わが十字架によって霊の貧しくされた者よ。天国即ち聖霊の

我、なんじのうちに在り」

と言つてくださるから、「はいっ」と無条件に受けとります。

あなたは私たちのアルファにしてオメガでいらつしやいます。本当にこんな嬉しいことはありません。主さま、この降誕節を私たちはそのようにして、あなたをお迎えし奉り、本当に聖名を讃え奉ります。一切は聖名のゆえであります。それがゆえに、主さま、また聖名に在つてであります。このような現実を本当に感謝いたします。

この兄弟姉妹たちは一步も退くわけにいきません。どうぞ、明日も次の日もどしどし進ましてください。あなたによつて進まざるを得ません。倒れても滑つても転んでも、起き上がって行きます。本当に感謝、感謝、感謝。なんにも恐れるものではありません。

「恐れるなかれ、我なんじを贖えり。なんじの名を呼べり、なんじは我がもの

なり」

と。主さま、そのようにして、あなたのものとせられ、パウロが、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と、あのような現実を書簡の中で百何十回とそのことを語りながら、彼はあの驚くべき艱難の現実を、言語に絶する現実を突破して行きました。

主さま！ あなたが本当に私たちの一切であり、私たちのうちに住みたもうからであります。感謝いたします。どうぞ、この兄弟姉妹たちがその現実に一層、何ものも恐れることなく、ことに若い人たちがこの世界をいよいよ進ましましたまわんことを切に願ひ奉る。

日本の希望はこのような魂にかかっています。どうぞ、そのような魂が、何がきても本当にこれから戦わしめてください。そして、本当にそのようなことを、一人二人三人と、求めているところの友人に与えてください。かくして、

「ああ、こんな世界があつたか」

と言つて驚くようなことをあなたが始めてください。

私たちは自分に安住するわけにいきません。どうぞ、そのようにして、来年はまた、この一人びとりを通して、この喜びの中に入るような人を起こしてください。そのことを祈つていきます。また、本当に体当たりしていきます。感謝であります。

今、心からの感謝と讃美、聖名により捧げ奉る。アーメン！

